

『魂を生き返らせて下さるお方』 詩篇23篇1~4節 2018.11.18 加藤望師伝道礼拝説教より

『神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。…わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のを力をづける。』 エゼキエル 34:11、16

詩篇23篇…神の優しさが伝わってくる牧歌的な詩。かつて羊飼いだっただ少年ダビデは、弱くて臆病で頑固な羊を命がけで守った体験と、自分の人生を振り返った時、神こそが私たちの羊飼いだと自覚した。羊飼いなしに羊は生きられない。

①羊飼いなる主がおられるなら私には乏しいことがない…「乏しいことがない」とは、「迷子にならない」の意。乾季には草もなく、水場と言えば崖の下、という環境で、羊飼いが牧草を探し、安全に水場へ導く。目の前のことしか見ない羊が、たとえ迷っても、主は捜しだし、連れ戻して下さる。

②羊飼いなる主が私の魂を生き返らせて下さる…「魂」とは生きる気力！のこと。ダビデはサウル王に命を狙われ、逃げ込み身を寄せた敵国で、部下にも殺されそうになるという絶体絶命の窮地に。そこで彼は「自分の神、主によって奮い立った（I サムエル 30:1-6）」！肝臓移植しか助かる道がないと言われて、生きることを諦めた。「この病は死では終わらない（ヨハネ 11:4）」と主は語るも「死を通るのか」と不安になった。しかし、人工心肺につながれ、肝臓を摘出した時、まさに臨死状態だった命は、ドナーの肝臓によって奇跡の生還！体も元気にされたが、何よりも生きる気力が回復された。「御名のゆえに、義の道に導かれる」！もはや自分のために生きるのではなく、神のご計画へと導かれる。生かされた者は、神のために生きる力と勇気をいただく。

③羊飼いなる主が共におられるなら、私は災いを恐れない…命に必要な水を得るために、まさに死の陰(暗黒)の谷を歩むことがある。しかし心に、神に通じる道(シオンへの大路)がある人は、その涙を喜びの泉へと変えていただく(詩編 84:6)！死ぬまで40年病床にあったバジレア・シュリンク(ドイツの修道女)は、「地上の苦難・病・別れは、私たちがより良い天国人となるために神が用意されたもの」と語る。辛くて涙する時も、苦しくて意気消沈する時も、主が共におられるので、災いも恐れることはない。羊飼いは鞭と杖を用いて羊を正しい道に戻す。引き戻される痛みがあっても、正しい安全な道に戻った時、大きな慰めとなる。

★主は、命の日の限りあなたと共におられ、ずっと慈しみと恵みを注がれる。御声に従う時、行く先々で主はあなたを守り、豊かに養われる！